

# YAMAKADO NEWSLETTER

NO.200

2016/07/30

山門水源の森を次の  
世代に引き継ぐ会

## 山門水源の森がこうならないために・・・



竜ヶ岳 (16/07/21) (富岡明撮影)

昨年度作成した「山門水源の森2050」で、2050年には生物多様性に富む森を再生したいというのが大きな課題です。少なくとも1990年代の森にと・・・その森で目下の最大課題は、シカによる食害対策です。森の食害被害がピークになったのは、2013年でした。この年地元猟友会の方々による周辺の100頭余の有害駆除により被害は一時的に少なくなっています。上の画像は、昨年も報告した竜ヶ岳の最近の状況です。この画像の中には100頭を超えるシカが優雅に横たわって反芻を繰り返しています。山門水源の森でも、猟友会の方々の駆除が無かったら近い将来このような状態になったと考えられます。山門水源の森での、食害対策は2008年のササユリへの金網設置にはじまり、2010年からミヤコアザミ保護区・2011年の南部湿原ネット設置、2012年南部湿原にネットと波板設置と天然更新試験地ネット設置・2014年にブナの植栽地・中央湿原・北部湿原にネットと波板設置と続き、2016年にはブナの森～守護岩間にササ再生のためのネット設置(約900m<sup>2</sup>)を行っています。この他にササユリについては、個々の株に金網を掛けています。これらのネットや金網の巡視も大き



ピンク枠はササユリ  
白枠はその他植物

な仕事になっています。これだけの保護を行っていても、食害は無くならないということがありません。昨年実施したシカの糞粒調査では、過剰なシカの頭数であることが明らかになり、本年度はGPSを使ったシカの行動調査も行い、頭数管理や方法を検討することになっています。この調査には、森林総研と岐阜大学の協力をお願いしています。

竜ヶ岳の現況を見ると、食害にとどまらず土壌流出が著しいことが分かります。この土壌流失に伴って土壌中の埋土種子も流出することとなり、シカが居なくなったとしても以前の植生の復元は叶いません。山門湿原では、2011年の防獣ネット設置によってミツガシワをはじめとする植物の再生が進んでいますが、全く動物が入らないことにより湿原の攪乱が無くなることによる問題も浮上します。

## 森の生物多様性保全には、「風が吹けば、桶屋が・・・」的センスが必要

この森が生物多様性に恵まれている要因には、気候区の接点（日本海側と太平洋側）・地質（花崗岩）・湿原の形成が古い（4 万年以上）・900 年にも及ぶ人の関わりがあったことです。その結果多様な環境が存在し、その環境に適応した動植物が生息・分布しているためです。このような環境が急激に変化したことが、多様性の喪失につながっています。大きくは経済構造の変化で二次林が放置され、人が出入りしなくなったこと・シカの保護政策の見通しの甘さが今日の状況を創り出したと考えられます。今、森では絶滅に瀕する動植物を何とか護ろうと、ネット設置等でその場しのぎの膨大な作業をしています。しかし、根本的な問題解決にはなっていません。**絶滅から再生は無いためやむなくやっているというのが実態です。**しかし、防獣ネットで保護することですべてが解決するわけではありません。



分布が拡大したトキソウ (15/06/05)



再生してきたミツガシワ (16/05/03)



攪乱地に多いミミカキグサ (10/08/18)

2010 年壊滅状態になったミツガシワの再生を考え防獣ネット及び波板を設置した南部湿原では、2015 年には、1990 年代にも見たことが無いほどトキソウの分布が拡大しました。2016 年には、ミツガシワも思いの外再生し、1990 年代の状態に戻るのもそれほど遠くない状態になりました。防獣ネット等の設置によって食害が減ったためです。しかし、これで「すべてよし」と言うわけでは無いところが、保全の難しいところです。食害が減ったり、湿原表面の攪乱が減ったことで、逆に減っていくものもあることです。2015 年に分布を広げたトキソウは、今年には既に減少しました（継続的な観察をしないと確定的なことはいえないが）し、2010 年には広い範囲に分布していたミミカキグサは明らかに減少しています。これらは、食害が減ったことに

より草丈が伸びた影響や、裸地状態の湿原面を好む植物が減ってゆくことを示しています。保全のためと考え実施したネット設置が、多様性保全のために長期にわたって有効かは疑問です。生態系保全の難しさがここにあります。絶滅を回避するための臨時的処置は、長期にわたる調査・観察によって適宜変更してゆく必要があります。このことは、「やまかど・森の楽舎」の付属湿地の除草作業でも確認することが出来ます。ここは、



除草中の付属湿地 (16/07/24)

希少種の「種の保全庫」としての役割も担っていますが、主として来訪者に入ることが出来ない山門湿原の動植物を間近で観察して貰うようにと造成したものです。放置すれば勢力の強い植物が分布を広げ、弱いものは消えてゆきます。多くの動植物を維持するためには、それぞれの動植物が平衡状態になるように維持管理しなければなりません。異常に数が増えたトノサマガエルを捕獲し他所へ移動させているのもそのためです。植物の管理は、これまで年間 3 回ほど分布を広げすぎたものの除去を中心に行っていますが、残しておきたい植物も種子による拡散を押さえるために飛散前に採取除去する必要があります。一方これまで増やすことのみを力を入れてきたサギソウなどは、増えすぎた結果咲かないという状態も起

こりだしており、適度な植え替え・除去も必要なものもあります。このように狭い付属湿地でも、多様性を保全するためには、絶えず目を光らせて状況を見極め手を入れる必要があることがわかります。これを 63.5ha の森全体でやろうとなれば、日々格闘している今よりも多くの人手が必要なこととなります。しかし、最も優先せねばならないのは、森の実態を日々把握して対策を考えることだと感じています。